

原 著

作業療法・理学療法学生の
精神医療に関するイメージ
—— 講義前後の変化を通しての考察 ——

日比野慶子 井上桂子 東嶋美佐子

川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科

(平成8年5月22日受理)

Images Related to Psychiatric Medical Service
in the Students of Occupational and Physical Therapies
—— Comparison of images before and after a series of lectures ——

Keiko HIBINO, Keiko INOUE and Misako HIGASHIJIMA

*Department of Restorative Science
Faculty of Medical Professions
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted May 22, 1996)*

Key words : psychiatric hospital, mentally handicapped person,
psychiatric occupational therapy, student's image, education

Abstract

The purpose of this study was to survey the change in images of psychiatric medical service which therapy students had before and after lectures on this subject. Twenty-seven occupational therapy students and 41 physical therapy students were asked to write down the words that described the images "a psychiatric hospital", "a mentally handicapped person" and "psychiatric occupational therapy" created in their mind before and after the lectures. The results showed a tendency for the number of words regarding "a psychiatric hospital" and "a mentally handicapped person" to decrease, whereas the number of words regarding "psychiatric occupational therapy" increased after the lecture. Occupational therapy students who had met mentally handicapped person and seen psychiatric occupational therapy being carried out in psychiatric hospitals had already developed more affirmative images than physical therapy students before the lecture. Therefore, it

is suggested that contact experiences have a great influence on the development of affirmative images.

要 旨

リハビリテーション専門学校の1年生（作業療法学部学生27名，理学療法学部学生41名）に【精神病院】【精神障害者】【精神科作業療法】の3つの言葉に関するイメージ調査を行い，講義前後でそれらのイメージがどのように変化したかを分析した．その結果，連想語数そのものは両学部学生とも【精神病院】【精神障害者】については講義後に減少する傾向がみられたが，【精神科作業療法】については講義後に増加する傾向がみられた．連想語の内容に関しては，夏休みに精神病院見学を体験した作業療法学部学生の方が理学療法学部学生より講義前既に肯定的イメージを多く持っており，接触体験の有無がイメージ形成に与える影響の大きさが示唆された．両学部学生とも講義後に肯定的イメージが増加する傾向がみられた．

精神科医療に関する偏見は根強いものがあるが，そのような偏見の是正も教育の役割と責任であろう．

はじめに

精神保健領域における治療や制度は今日さまざまな点で発展が見られるものの，今なお対象者やその家族などは窮屈な思いを抱きながら社会の中で生活している．精神保健法の改正の中でも福祉の視点が導入され，地域での支援，すなわち，対象者やその家族などが地域であたりまえの生活が送れるような受け皿や支援ネットワークの充実を強調しているが，現実には厳しい．例えば，今日の不況下就職口はなかなか見つからず，精神病院に入院していたことがわかれば門は閉ざされるため，入院歴を隠して就職したり，共同作業所を作ろうとすると地域住民の反対運動が起こったりする状況は依然として存在している．これらの背景にあるのは精神医療や精神障害者に対する根強い偏見である．吉松等は偏見に関する考察を実証的資料に基づいてさまざまな角度から行っているが，その中に，「精神医療従事者自身の中にも一種の偏見がまだ存在しているのではなかろうか．その1例が，精神分裂病という診断名を患者にもその家族にもなかなか明言できないという事実である」と述べている¹⁾．このような従事者自身の内なる偏見にも目を向けようとする姿勢と相通ずるものがあると思うが，看護学生を対象とした精神障害者に対するイメージの変化²⁾や態度の変化³⁾，意識構造の変化⁴⁾を考察した研究がある．これらの

研究に共通しているのは，精神障害者と実際にふれあう体験の後では肯定的イメージや態度が増える傾向にあった，という結果である．

今回我々は，作業療法士・理学療法士養成施設1年生の作業療法学部学生（以下 OTS と略す）と理学療法学部学生（以下 PTS と略す）の精神医療に関するイメージ調査を一連の講義の前後に行った．イメージの指標として連想語数と連想語の内容を取り扱い，精神医療に関する専門教育を受けていない時には学生達はどのようなイメージを持ち，それが講義を受けることでどのように変化するかを考察を試みた．

対象と方法

1. 対 象

対象はKリハビリテーション学院1年生で，その内訳は OTS 27名（男2名，女25名，年齢は36歳～18歳，平均21.7±5.1歳），PTS 41名（男14名，女27名，年齢は36歳～18歳，平均20.5±3.3歳）である．

2. 方 法

1) 講義：2学期に OTS・PTS に対して共通科目として，作業療法概論が30時間あるが，その中の9時間（3回）を精神科作業療法概論講義に当てた．その他にビデオ鑑賞（アメリカ映画『普通の人々』）を2時間行い，感想文を書かせ，それを基に話し合った．

2) 調査時期：1995年11月21日（第一回講義

直前), 1995年12月4日(最終講義直後).

3) 回答時間: 制限は与えなかったが, 全員が15分ほどで終了した.

4) アンケート: 【精神病院】【精神障害者】【精神科作業療法】の3つの言葉から連想する単語をそれぞれ10個以内, 自由記述で書くように求めた. 連想語数と連想語の内容の変化を各項目について分析した. 自由連想記述では同意語や類似語がかなり多い. そこで, 3人の教員(作業療法士)の合議で同意語や類似語をまとめていくつかのイメージ項目の分類を以下の如く試みた. 【精神病院】は設備環境に結び付いた《設備・環境イメージ》, 病気(者)や治療(者)に結び付いた《病気・治療イメージ》, 情緒や印象を表す《情緒・印象イメージ》, 分類困難な《その他イメージ》の項目に分類した. 【精神障害者】は病名や病気の定義のようなものに結び付いた《病気イメージ》, 治療(者)に結び付いた《治療(者)イメージ》, 患者の状態や情緒, 印象を表す《状態・印象イメージ》, 《その他イメージ》の項目に分類した. 【精神科作業療法】は作業活動に結び付いた《作業活動イメージ》, 治療方法や作業療法の役割, 資質, 対応に結び付いた《治療イメージ》, 情緒や印象を表す《印象イメージ》, 《その他イメージ》に分類した. 単語を書くようにと指示したが, 文節や文章の答えもあった. それらは無効とせず1単語と数え, その中の主

要な意味によって分類した.

5) 統計処理方法: 連想語数の差の検定は, OTS とPTS の差についてはt検定を, 各個人の講義前後の差についてはpaired-t検定を用いた.

結 果

1. 連想語数の変化

連想語総数と一人当たりの平均連想語数を表1に示す. 講義前に連想語総数の最も多かったのは【精神病院】であり, 次いで【精神障害者】【精神科作業療法】の順となっていた. 連想語総数は【精神病院】【精神障害者】においては講義後に減少する傾向がみられ, 【精神科作業療法】はOTSではほとんど変わらず, PTSにおいて講義後に増加する傾向がみられた.

一人当たりの平均をみると, 講義前の【精神科作業療法】と講義後の【精神病院】ではPTSよりOTSの方が多く連想語が浮かんでおり, 有意差がみられた. 【精神病院】においては講義後に減少する傾向があり, OTS・PTSとも有意差がみられた. 【精神障害者】においても講義後に減少する傾向があり, PTSでは有意差がみられた. 【精神科作業療法】はOTSはほとんど変わらず, PTSでは講義後に有意に増加していた.

2. 出現頻度の高い連想語

上位10個または3人以上が書いたものを表2

表1 連想語総数と一人当たり平均連想語数

項 目	学 生	時 期	連想語総数	平均連想語数±標準偏差	t 検定	paired-t 検定
精 神 病 院	OTS	講義前	155	5.7±2.1	-----	*
		後	130	4.8±2.0		
	PTS	講義前	196	4.8±2.1	-----	**
		後	139	3.4±1.6		
精 神 障 害 者	OTS	講義前	124	4.6±2.6	-----	
		後	109	4.0±2.3		
	PTS	講義前	171	4.2±2.5	-----	*
		後	141	3.4±1.6		
精神科作業療法	OTS	講義前	127	4.7±2.6	-----	
		後	129	4.8±2.5		
	PTS	講義前	121	3.0±2.0	-----	**
		後	159	3.9±1.7		

— t 検定, ----- paired-t 検定, **p<0.01, *p<0.05

表2 出現頻度の高い連想語

() 内の数字は% (連想者数/学生数×100)

	精神病院				精神障害者				精神科作業療法			
	OTS		PTS		OTS		PTS		OTS		PTS	
講義前	暗い	(51.9)	暗い	(31.7)	怖い	(22.2)	怖い	(17.1)	レクリエーション	(37.0)	大変そう	(24.4)
	鉄格子	(37.0)	隔離	(29.3)	不安定	(18.5)	孤独	(17.1)	箸入れ	(22.2)	難しそう	(12.2)
	鍵	(33.3)	怖い	(22.0)	うつ病	(11.1)	子供っぽい	(12.1)	ブリボーク	(18.5)	理解	(12.2)
	閉鎖	(33.3)	鉄格子	(17.1)	言語不明瞭	(11.1)	知能障害	(12.1)	編み物	(14.8)	コミュニケーション	(12.2)
	怖い	(14.8)	閉鎖(的)	(17.1)	孤独	(11.1)	突然	(9.8)	卓球	(14.8)	心理療法	(9.8)
	鉄柵・ベッド	(11.1)	鉄柵	(12.2)	純粹	(11.1)	挙動不審	(7.3)	農作業	(11.1)	グループ	(9.8)
	精神分裂病・人間	(11.1)	具体的精神病院名	(9.8)	人なつこい	(11.1)	偏見	(7.3)	園芸	(11.1)	絵画	(7.3)
	閉鎖病棟・広い	(11.1)	孤立	(9.8)	隔離	(7.3)	隔離	(7.3)	手芸	(11.1)	根気	(7.3)
	開放病棟・集団生活	(11.1)	白・静か	(9.8)	気がいい	(7.3)	手工芸	(11.1)	籐細工・革細工	(11.1)	困難	(7.3)
	明るい・OT	(11.1)										
講義後	暗い	(25.9)	暗い	(22.0)	繊細	(14.8)	孤独	(12.2)	レクリエーション	(25.9)	グループワーク	(14.6)
	隔離	(18.5)	隔離	(17.1)	素直	(11.1)	怖い	(12.2)	聞く	(22.2)	根気	(14.6)
	閉鎖病棟	(18.5)	OT	(14.6)	苦痛	(9.8)	共感	(18.5)	作業	(18.5)	作業	(12.2)
	鉄格子	(11.1)	怖い	(9.8)	抑圧	(9.8)	作業	(14.8)	傾聴	(14.8)	傾聴	(12.2)
	怖い	(11.1)	さわがしい	(9.8)	異常	(7.3)	卓球	(11.1)	共感	(12.2)	共感	(12.2)
	閉鎖的	(11.1)	閉鎖的	(7.3)	悩み	(7.3)	散歩	(11.1)	社会復帰	(12.2)	社会復帰	(12.2)
			社会復帰施設	(7.3)	悲しい	(7.3)	絵	(11.1)	コミュニケーション	(9.8)	コミュニケーション	(9.8)
			心を癒す場所	(7.3)			傾聴	(11.1)	話し合い	(9.8)	話し合い	(9.8)
			大変	(7.3)			社会復帰	(11.1)	OT	(9.8)	OT	(9.8)
			冷たい	(7.3)					忍耐	(9.8)	忍耐	(9.8)

に示す。【精神病院】については、OTS・PTSとも“怖い、暗い、鉄格子、鉄柵、鍵、閉鎖、隔離、孤立”という連想語が多かった。OTSは講義前に既に“開放病棟、明るい、広い”という連想語が出ていたが、講義後はそれらは消失した。他方PTSは講義前は否定的な連想しか浮かんでいなかったが、講義後には“社会復帰施設、心を癒す場、OT”という連想語が出てきた。

【精神障害者】についても、OTS・PTSとも“怖い、不安定、孤独、突然、挙動不審”という否定的な連想が多かったが、【精神病院】ほどではなく、“子供っぽい、人なつこい、孤独”という連想も出ていた。講義後にはもう少しその方向へのイメージがふくらみ“苦痛、悩み、悲しい、繊細、素直”という連想が出てきた。

【精神科作業療法】については、講義前はOTSとPTSとの間できわだった違いがみられた。OTSがほとんど作業活動を羅列したのに比べて、PTSは“大変そう、難しそう、根気、困難”という漠然とした印象がまずあり、そして、“コミュニケーション、心理療法、グループ、絵画”などの具体的な連想が出ていた。講義後にはこの違いが目立たなくなり、両方とも“傾聴と共感、社会復帰”などの専門用語を連想する者が増えた。

3. イメージ項目の分類

同意語や類似語をまとめていくつかのイメージ項目の分類を試みた結果を表3に示す。また、表3の分類による連想語数の占める割合を図1に示す。

【精神病院】の結果は、全体の48%が《設備・環境イメージ》、25%が《病気・治療イメージ》、20%が《情緒・印象イメージ》、8%が《その他イメージ》であり、講義前後で大きな変化はみられなかった。OTSの方が《設備・環境イメージ》の割合が高いが、講義前既に“開放病棟、広い、庭、花、広場、畑”などのPTSの連想語には出てこないものが含まれていた。

【精神障害者】の結果は、全体の68%が《状態・印象イメージ》、20%が《病気イメージ》、5%が《治療(者)イメージ》、8%が《その他イメージ》であり、講義前後で大きな変化はみられなかった。OTSはPTSより《状態・印象イメージ》の割合が高かったが、その中で“独り言、猫背、前かがみ、目の下にくま、拘縮”などのような状態に関する連想語がバラエティに富んでいた。一方PTSは“突然、錯乱、孤独、近寄り難い”などの戸惑いを表すような連想語がOTSより多かった。そしてPTSには“異常、正常、正常と異常の区別、基準”などの精神病を異常と決めつけることへの疑問のようなものが講義後

表3 イメージ項目の分類

イメージ項目	連想語の例
精神病院	設備・環境イメージ：鉄格子、鍵、牢屋、山奥、庭、隔離、閉鎖、閉鎖(開放)病棟、社会復帰施設、心を癒す場など 病気・治療イメージ：精神分裂病、うつ病、叫び声、カウンセリング、OT、Dr.、長期入院、集団生活など 情緒・印象イメージ：怖い、暗い、陰気、寂しい、静か、冷たい、危ない、明るい、穏やか、優しい、のんびりなど その他イメージ：白、ピンク、ジャージ、偏見、人間、死、哲学、別格、現実的、非現実的、知らない世界など
精神障害者	病気イメージ：精神分裂病、うつ病、痴呆、発達障害、気ちがい、心の病、異常、普通の、困っている人など 治療(者)イメージ：カウンセリング、薬、注射、社会復帰、デイケア、自己実現、自己受容、作業、散歩など 状態・印象イメージ：徘徊、挙動不審、突然、不安定、怖い、孤独、純粋、繊細、人なつこい、子供っぽいなど その他イメージ：パンドラの箱、差別、無理解、価値、個性、人格、人間、バラバラ、少数派、戦い、多種多様など
精神科作業療法	作業活動イメージ：農作業、園芸、箸入れ、レクリエーション、卓球、編み物、絵画、陶芸、コミュニケーションなど 治療イメージ：聞く、傾聴、共感、根気、理解、社会復帰、長時間、かかわり、心理療法、心の支え、協調性など 印象イメージ：大変そう、難しそう、困難、不思議、想像がつかない、すごい、明るい、面白そう、楽しそうなど その他イメージ：全て、心のマヒ、無、空、モンゴル高原、モモ、こり症、ピンク、なに気ないこと、星空など

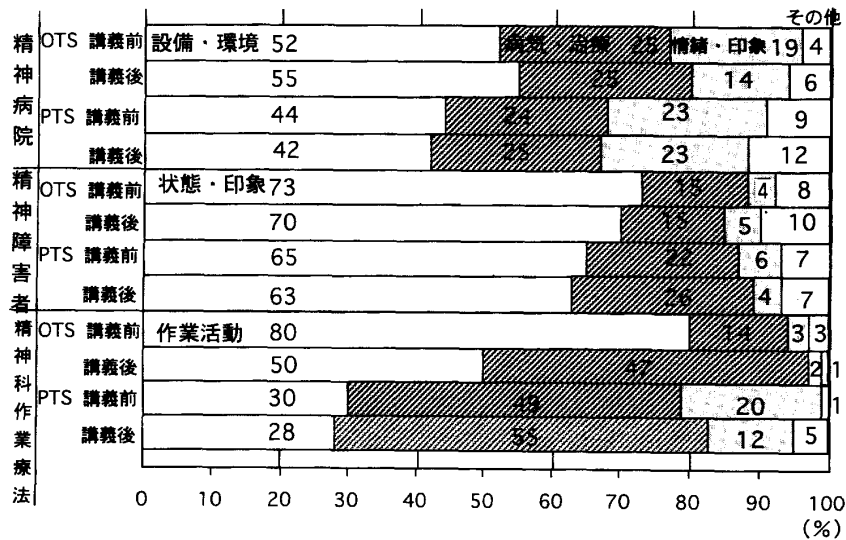


図1 イメージ項目における連想語数の占める割合

に出ていた。

【精神科作業療法】の結果は、OTSとPTSで明らかな差があり、OTSは講義前80%が《作業活動イメージ》で占められ、講義後も50%を占めていた。講義前は41種類もの具体的な作業活動が連想された。PTSは講義前後とも《作業活動イメージ》より《治療イメージ》の方が高い割合を示した。OTSもPTSも講義後に《治療イメージ》が増える傾向がみられ、その中には“信頼関係、かかわり、出会い、分かち合い”などの対人関係に関する連想語が新しく出てきた。また、“時間をかける、ゆっくり、待つこと”などの時間に関するイメージが増えていた。

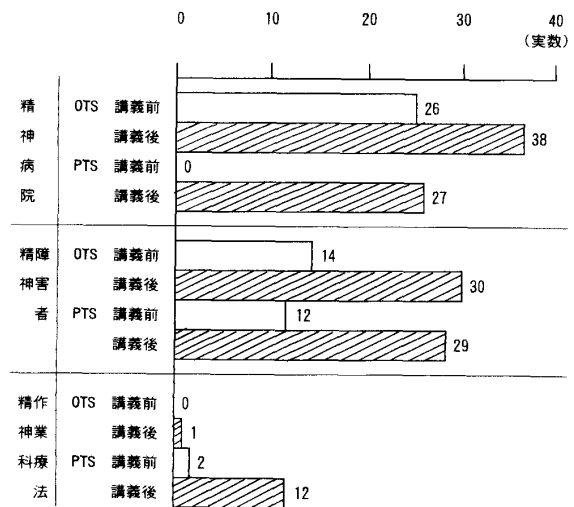


図2 肯定的もしくは好意的連想語数

4. 肯定的もしくは好意的連想語の変化

肯定的もしくは好意的連想語の変化を図2に示す。全ての項目においてOTSもPTSも講義後に肯定的、好意的連想語が増える傾向がみられた。【精神病院】【精神障害者】についてはOTSでは講義前に既に肯定的、好意的連想語が出ていたが講義後さらに増加した。講義前にPTSは【精神病院】については全く肯定的、好意的連想語を記載しなかったが、講義後は“明るい日射し、大きな庭、社会復帰施設、心を癒す場、やすらぎの場、くつろげる場、避難所、なごやかな音楽、やさしい”などの連想語が出てきた。

【精神障害者】についてはOTSは“普通の人、困っている人、助けを求めている人、明るい、努力、ていねい”など、PTSは“正常、みんな持ってる、自分と変わらな、純粹、素直、豊かな感性、やさしい”などの連想語を回答した。【精神科作業療法】では連想語数が少なく、特にPTSでは少なかった。PTSでは講義後に“前向き、寛大な愛、思いやり、楽しそう、すばらしい”などの連想語が出てきた。

考 察

1) 連想語数について

【精神科作業療法】が最も連想語数が少ないのは、【精神病院】【精神障害者】が一般語であり、【精神科作業療法】は専門的ニュアンスを含むまだなじみの少ない用語であるためと考えられる。【精神病院】の連想語数が最も多いのは、建物として現実に目に触れることができ、且つ衝撃的な事件が報道されるなど、精神医療の中でインパクトの強いのは病院で起こることだからであろう。一方【精神障害者】になると、病院ほど具体的な姿や形が想像できないのではないだろうか。

ある事柄についてよく知るようになると、それについての連想は量的にも質的にも豊かになるであろうと仮定したが、OTSもPTSも【精神病院】【精神障害者】の項目で講義後に連想語数が減少した。連想語数を講義後に減少させた要因はいくつか考えられる。ある一人の学生の感想に象徴されるが、あまり知らないことに対して接近した時期に2回も調査されて、いささ

かうんざりしていたということがあったかもしれない。あるいは講義前は新鮮な軽い気持ちでできたのが、少し知識を得て慎重になったのかもしれない。【精神科作業療法】についての連想語数は、PTSにおいては講義後に統計的に有意な増加がみられた。講義前のPTSの連想語数は、PTS、OTSを含めた全ての項目の中で最も少ない。PTSにとって【精神科作業療法】はあいまいでつかまえてどころのない言葉であろう。アンケート調査時期の学生は作業療法概論の身体障害、発達障害を終えて初めて精神科障害の講義を受ける時期である。それまでに教養科目としても専門科目としても精神医療についての講義らしい講義はないと言ってもいい。OTSは夏休みに1ヵ所以上の精神病院を見学しているが、PTSはその経験もない。【精神科作業療法】がOTSにとってあいまいでとらえどころがないのはPTSと同じであろうが、実際に見学した体験がPTSとの差を生んだと考えられる。多少は具体性のあるイメージを持っているので、講義を受けた後もあまり量的には変化しなかったものと思われる。PTSが講義後に連想語数がかなり増加したのは、臨床の話や理論を聞いて新鮮な驚きと好奇心を刺激されたためではないだろうか。

連想語数の一人当たり平均は、どの項目においてもPTSよりOTSの方が多し。講義前の【精神科作業療法】においては統計的に有意であった。これは前述したように、入学時からのOTSとPTSの体験の違いを反映していると考えられる。

ある物事について知ることが増えると連想語数が増加すると、単純には言えない。しかし、知ることを通してイメージが量的にも増える場合があることを示唆する結果を得た。

2) 連想語の内容について

①【精神病院】のイメージ

【精神病院】についてはOTSもPTSも“鉄格子や鍵で閉鎖し、隔離する暗くて怖い所”というイメージが圧倒的である。PTSは講義前には否定的なイメージしか浮かばず、4人が具体的な精神病院名を挙げていた。小さい時に「悪いことをしたら〇〇病院へ入れるよ。」と言われた経

験から、精神病院＝悪いことをした人が入る所＝怖い所というイメージができあがり、成人しても修正されないまま残っているのであろう。講義後に否定的なイメージが減少して、“明るい日射しの庭もある社会復帰施設であり心を癒す場でもやすらぎの場でもくつろげる場でもあって、なごやかな音楽が流れていたりする”などと収容施設【精神病院】ではない治療機関【精神病院】を表すイメージが出てきた。精神病院を見学したことのある OTS の中には、わずかだが講義前既に“開放病棟もあり、明るくて広い”というイメージを持っていた者がいる。一般に【精神病院】についてよく言われているような否定的なイメージを学生達も強く持っているが、講義や見学などの体験を通して【精神病院】は治療的機能を有する施設であるというイメージの芽生えがみられる。

②【精神障害者】のイメージ

【精神障害者】に関するイメージは、“独り言を言ったり徘徊したりボーッとしているかと思うと突然暴れたり叫び声をあげたり、挙動不審で不安定なところがある怖い人、そしてやせて鋭い目をして人と交わろうとせず近づきにくい人”というものである。吉松等は『偏見の由来の一つには精神障害者に対する「危険視」があり、もう一方には「わからなさ」があろう』と述べているが¹⁾、学生にもそのイメージがある。PTSの方がより顕著である。【精神病院】と違うのは、PTSにも講義前に既に“さみしそう、悲しそう”と同情的なイメージが出ていることや、“子供っぽくて人なつこい”と親近感も抱き、“内面の豊かさや純粋さ”などの健康な部分に気づいている者がいることである。この傾向は OTS も PTS も講義後さらに強まり、“苦痛や悩みや悲しみを抱えているむしろ素直で繊細な人”という理解的イメージが増えるとともに、「普通の、自分と変わらないところもある人」とイメージできる人が増えている。PTSは講義後“異常とは何か？ 正常と異常の基準はどこにあるのか？ 自分にも(精神障害者になる)可能性はある”と精神医療の根本的課題にイメージをふくらませた者が数名いる。障害者を対象とする仕事に就こうとしている OTS、PTSとして、精神障害者への“怖い、近

づきにくい”というイメージは持ちながらも少しずつそのイメージを修正し、障害者を理解しようとしている学生の真摯な態度がうかがえる。

③【精神科作業療法】のイメージ

【精神科作業療法】のイメージは講義前は OTS と PTS で大きく違っていた。OTSは1学期から作業活動の技術実習があり、作業療法といえば作業活動というイメージが出来上がっているためか、【精神科作業療法】の連想語の80%、41種類の作業活動が挙げられた。身体障害の作業療法も精神障害の作業療法も作業療法はとにかく作業活動を使うのだ、というイメージである。病院見学でも実際に見たのは、作業療法士が患者と共に何かの作業活動をしている場面が多かったであろう。PTSにはない“箸入れ、箱折り”の内職的作業も連想されていた。一方 PTS は【精神科作業療法】は何をするのかわからず、なんとなく精神障害者のイメージからして“大変そうで難しそうで根気がいりそう”というイメージになり、“心理療法やコミュニケーション、作業活動”もあるだろうというイメージである。講義後にはこの違いは小さくなり、“傾聴と共感、受容的”という対応に関するイメージや“社会復帰、リラックス、自立”などの目標や目的に関するイメージや、“信頼関係、かかわり、人付き合い、ふれあい”のような人間関係の大切さに関するイメージや、“ゆっくりと時間をかけて待つ”という精神科の特徴を表すイメージが増えており、《治療イメージ》が豊かに幅広く広がっている。PTSは“大変、難しい”などが減って“面白そう、楽しそう、すばらしい”などが増えて、否定的イメージと肯定的イメージが拮抗してきた。

【精神病院】【精神障害者】【精神科作業療法】についてのイメージの講義前後における変化をまとめると、以下のようになるであろう。OTS、PTSとも【精神病院】【精神障害者】に関するイメージは否定的なものが多く、特にその傾向は講義前に顕著である。講義前のそのようなイメージを文章にすると、「鉄格子や鍵のある暗くて怖い所に、隔離され閉じ込められた何をするかわからない怖い人達や子供っぽい人達が、独り言を言ったり徘徊したりボーッと一人閉じこもったりしていて、作業療法士はその中でいろ

いろいろな作業活動を使って治療しているが、なんだが大変そうで難しそう。」というふうになるであろうか。講義後には肯定的内容が増えているが、それはさまざまな見方が出てきたというイメージの豊かさへの変化を示唆している。そのイメージを文章にしてみると、「鉄格子や鍵のある暗くて怖い所だが、明るい日射しの大きな庭がある病院もあって、なごやかな音楽が流れていたりする。病院に隔離され閉じ込められた人達はやはり何をするかわからない怖いところがある。でも人一倍純粋で繊細なために悩みや苦しみで混乱していて、助けを求めている人もいるだろう。一人ぼっちでさびしい人達なのかもしれない。人なつこくて明るいところもあり、自分達と変わらない面もあるのではないだろうか。こういう人達にとって病院は心を癒す場であったり安らげる避難場所になっていることもあるのだろう。心を病む人達に対しての作業療法は話をよく聞いて共感し信頼関係を築くことが大切で、人とかかわりあいやコミュニケーションの治療とも言えるのではないか。目標として社会復帰も考えられ、方法として作業活動を使うことは多いだろう。いずれにしても時間をかけてゆっくりと進める根気のいる治療のようだ。」というようにまとめられるだろう。

おわりに

OTS, PTS とも精神医療に関するイメージは否定的なものが多く、偏見の根強いことが推察できる。数は多くないが講義前に OTS には肯

定的なイメージが浮かんでいたのは、夏休みの見学実習の影響が大きいと考えられる。PTS・OTS とも講義後に肯定的なイメージが増える傾向がみられたが、精神医療についての知的理解の面では少しは刺激を与えたようである。実際に接触して体験すること、治療対象を知ることの大切さが改めて確かめられたように思う。もちろんこの変化はこの講義のみがもたらしたのではなく、その他の講義やこの時期までのさまざまな体験の集大成を反映しているであろう。鈴木等⁵⁾の研究によると、精神病院、精神病患者という言葉は「実習終了後に肯定的反応が増え否定的反応が減少したが、卒業前にはもとにもどる傾向がある」という。講義や実習の後に【精神病院】【精神障害者】に対する肯定的イメージが芽生えてもそれは持続しがたいということであり、偏見の変容の困難さをうかがわせる報告である。

ほとんど患者に接したことのない学生達に精神科作業療法が「どういう人を相手にどういうことをして、どんな効果をあげているか」を伝えるのは難しい。治療の対象の精神障害者を知らなければ専門的知識を話しても理解できないであろう。わずかな時間に知ってもらうのは限界があるが、これまで試行錯誤の経験の中で、自分の接してきたさまざまな患者との関わりの体験、その時に感じたことなどをできるだけ具体的に、そして自分自身の中の偏見も隠さず伝えることを通して、自己の内なる偏見に気づく作業をしてもらうことの必要性を感じている。

文 献

- 1) 吉松和哉, 小泉典章 (1993) 精神病と偏見をめぐる現代社会の病理. 精神医学, 35(4), 342-348.
- 2) 中川幸子 (1991) 本学学生 of 精神看護学実習前後の精神障害者イメージの変化に関する一考察. 日本赤十字看護大学紀要, 5, 29-35.
- 3) 任 和子, 谷垣静子, 祖父江育子, 豊田久美子, 北山裕子, 中井義勝 (1995) 看護学生の精神障害に対する態度について—実習を通して変化した態度は卒業時にも維持されるか?. 京都大学医療技術短期大学部紀要, 15, 27-33.
- 4) 金山正子, 田中マキ子, 川本利恵子, 内海 滉 (1995) 看護教育による精神病に対する看護学生の意識構造の変化—3年間の継続的研究—. 日本看護研究学会雑誌, 18(3), 21-31.
- 5) 鈴木啓子, 中川幸子, 永井優子 (1995) 精神科医療に対する看護学生の意識の変化—経時的变化と精神科への就業意欲との関連について—. 日本看護学教育学会誌, 5(2), 120.